

ペットブーム生と死

「もー最高にかわいいーつ」。真っ白なビレーネー犬を見つけ、小学生の女の子がはしゃぎ声を上げた。

着飾ったトイ・プードルが、ちぎれんばかりにしつぽを振り、飼い主にじやれつく。抜けるような青空。

心地よい風に万国旗がはためいた。

5月5日。松山市の北東部、石手川ダムから国道317号を車で約10分。東川町の山あいにある県動物愛護センターの芝生広場で、「愛犬といつしょに大運動会」が開かれていた。

愛犬とのふれあい通し、飼い主に終生飼育を再認識してもらう趣旨の恒例行事だ。しつぽ振り競争、障害物リレーなどを楽しむ。つややかな毛並み、行き届いたしつけ。銘柄犬も多く、ペットブームを実感させる。

ぎわう広場から数十メートル離れた管理棟。おりの中に、不安げな表情を浮かべる犬や猫がいた。飼育放棄などで県内各地から収容された。ここに来て5~7日後には、処分される。

不幸な命減らしたい(県動物愛護センター) 飼う責任説き続ける

「愛犬といつしょに大運動会」から2日後の5月7日午後。松山市東川町の県動物愛護センターに1台のワンボックスカーが着いた。センターの委託業者。東予から、住民が市役所に持ち込んだり、通報で捕まえたりした犬や猫を回収してきた。車に積んだおりには、焦げ茶色の獣犬が3匹。「兄弟でしょうね」センター担当係長の堀内道生(52)がつぶやいた。

おりの横で、麻袋がもぞもぞと動いた。「ミヤー」。子猫が何匹も入っていた。管理棟のシャッターが開き、車はバックで入っていく。3匹はおりから成犬房に。寄り添つて壁際に座り込んだ。中・南予からの車も続々。さらに3匹が同じ房に入った。1匹のボクサーがおりに前脚を

かけ、見慣れぬ外の様子を眺めていた。

愛らしく、しつけやすい子犬に比べ、成犬になると引き取り手が少ない。猫はもっと少ない。引き取り手がありそうな子犬は、管理棟には入らない。

管理棟に入るかどうかで運命が決まる。

センターは犬や猫が生きている間、大切に世話を

する。毎日、餌や水を与える。情が移り、毎回心が痛む。主任業務員の中岡満明(44)は目を伏せた。

センターやは慣れてくる。情が移り、毎回心が痛む。主任業務員の中岡満明(44)は目を伏せた。

■ 際限ない処分

5月下旬、センターを訪ねた。処分を取材するためだ。特別に許可を得た。前に見た犬や猫は、もういなかつた。

午前9時半すぎ、係員が成犬房にいた10匹を通路に出す。隣の部屋にある操作盤のモニターに、通路が映し出された。可動式の壁が通路の端からゆっくり通り、「ドリームボックス」と名付けられた処分機に追い込む。全部の犬が入り、金属の扉が閉まった。

今度は密閉された内部の様子が映る。「注入」ボタンが押された。床の方から二酸化炭素(CO₂)が充満していく。力がふつと抜けたように、背の低い犬が倒れた。大型犬も次々と。1分もたたないうちに、すべてが崩れ落ちた。無音のモニター越しの光景。命の灯が消えるのを目撃するのに、実感が乏しい。

絶命させるため、CO₂が充満した状態が6分間続く。別室では、プラスチックケースに入った猫が簡易処分機にセットされる。1匹の白い猫が、身じろぎもせずにこちらを見つめていた。

やがて、CO₂を排出した「ドリームボックス」の扉が開いた。毛皮の敷物のように折り重なる10匹。係員が首輪を外す。機械作業で焼却炉に投入された。鈍い落下音が響く。

吸いたくなり、屋外に出た。曇天の下、強い風が木々を揺らしていた。

その間も、空いた成犬房の洗浄が続いている。午後には次の犬や猫が送り込まれる。際限なく続く処分。この現実を前に、立ち尽くしかなかつた。

■ 問われる覚悟

5月8日。センターで月1回の子犬譲渡会が開かれた。運良く命拾いした子犬約10匹の元気な鳴き声が響き、参加者は新しい「家族」との出会いに胸を膨らませる。「飼っていたのが死んだ」「センターの犬は健康管理が万全」「飼うなら捨てられた犬の方が意味がある」。引き取りの理由はさまざまだ。約30人が参加した譲渡前の講習会。センター主任の木村琴葉(34)が業務内容の説明を始めた。冷や水を浴びせるような実例が、スライドを使って紹介される。

「一言うことを聞かないからと飼い犬を持込み、収容中の子犬を見て「1匹くれ」と言い放った男性。おむつを着けた高齢犬を「死に目を見たくないので」と手放した女性」。「ここは、こういう人たちの尻ぬぐいをする施設ではありません」

参加者を見詰め、不妊・去勢手術や終生飼育の用意があるか、木村は繰り返し尋ねた。譲渡した犬が再びセンターに戻ることがあってはならない。「この子たちが生を受けた意味は何だったのか、よく考えてほしい」

処分ゼロへ、センターと連携し、犬や猫の不妊・去勢手術を啓発する松山市のNPO法人「えひめイヌ・ネコの会」の高岸ちはり代表(58)は安易な飼育に警鐘を鳴らす。「しつけや散歩、高額な治療費、介護など大変さを知らずに飼い始める人が多すぎると、育児や高額ローンを組むのと同じ覚悟が必要なんです」

■ 新しい首輪も

センターの職員9人中、所長の仙波和幸(59)ら6人が獣医師だ。動物を愛し、命を救う資格を持つながら、社会的要請で精神的負担の大きい作業

に従事している。

「処分はセンターに収容される『不幸な命』を新たにつくらないために、病気の命を救うのと根本的には一緒。殺しているが、命を助けている」。業務課長の岩崎靖(54)は、自らの心とこう折り合いをつけている。

ただ、人に危害を加えたわけでもない犬や猫の処分は、理屈で割り切れるものではない。決して、慣れることはできない。心をもつた人間が見送つてやることが、命を絶つ責任だと思う」。言葉の端々にらも解放されない。

「不適切かもしれないが、処分する犬や猫を『これはモノだ』と言い聞かせている。でも、やっぱりモノと見ることはできない。心をもつた人間が見送つてやることが、命を絶つ責任だと思う」。言葉の端々に苦悩がにじむ。

担当係長の堀内は、処分した首輪を手に、やりきれない思いを募らせる。「新しい首輪も多い。犬の名前が書いてあるのも。家族で二コ二コしながら付けたのだろう。それがなぜ、ここで外されなければならなかつたのか……」

センターは、小学生の動物愛護教室や専門学校生を招いた施設見学など啓発に力を入れている。命の大切さや終生飼育の責任を説き続けることが、不幸な命を減らす早道と考えているからだ。堀内は吐露した。「言葉を話せない犬や猫に代わって悲惨な状況を訴えることが、自分自身の救いにもなると思っているんです」

● 処分の実態

県動物愛護センターは初めて通年稼働した2003年度、犬と猫を計8425匹処分した。啓発活動などの結果、犬の処分数は減少傾向があり、09年度は5563匹と03年度比34%減った。ただ、09年度の飼い主への返還は43匹、譲渡は218匹で、収容された大半が処分される状況に変わりはない。県内20市町の登録犬は09年度末、計8万5781匹。未登録の犬も一定数いる。猫は登録制度がなく、飼育数は不明。